

内外新報

自四十一号
五十号迄

西垣文庫

文庫 10

7350

5

3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2



內外新報

第 四 號



定價八分

特
文庫10
7350
5

西垣文庫

内外新報第四十一號

慶應四年五月十九日

○督府 御沙汰書伊豆守殿内波



近日以来族下才々心違之もの 躬延寛仁之由趣
意不味持戴主人□□恭叹之まゝ肯て謹懐中々身を
以て従走し及以之野山内不々々屯集し夜を時殺
し民財を掠奪し益先暴を逞し左軍に抗闘す實に不
下教之國賊故に不々々今殺誅伐す 仰出々此後
為心得可未違也 大総督官 御沙汰書

五月

○五月十五日之晝山内焼失之場不

山王所供所

山王社清水堂大仏殿宛稻荷寺残存

吉祥園

俗山門といふ

瑠璃殿

俗中堂といふ

御水屋ハ残る且 神祖御灵屋ハ内別条也

御本坊

御門并ニ内築地ハ残る御殿向不残焼失

凌雲院残存

涼泉院七か

美王院残存

妙教院七か

美成院等分

根岸所隠殿 所門長屋残る所殿向不残焼失

此外ニ未多分

同不近辺町家焼失

仲町多側同所側町廿二條を以て焼失之場也

廣小治西側坊々々々同東側等分

致害全町残存

同朋町同所

上野町武丁同所同所丁目少

山下迄がんあぐ里村五条天神焼る

涉徒士町少く

下谷町同形 涉原新古町同形

坂本寺丁目式丁目残らず三丁目少く

谷中门外所至跡らず三所所より園子坂下死く焼矢

天五古本堂并子中门前所根津も少く焼る

山内并子近邊に有る外死骸片山内四十八九人三橋内

四人廣小路三人其外谷中口死ひとも都合七拾余人

焼死し者数不知

十五日約五ツ時おの戦争お始七ツ時迄終る共火八熾

に夜半以迄残り火燈十六日壹造と有る

昨十四日之野屯集し者も追付を人々の命 大惣督

府より各藩隊長中へ下りし一日夕刻を至付橋

とメ切り下谷辺ハハヨよおはハ寸筋遠市門外廻市中

にあり立退り中を以て獨居しとて徳町と老を援け勿成

智く乃後よ逝すといふもの陸續とておひ多しとて

其外泣く具を運中一強動ひとてありす十五日早朝

より友軍の人數繰りし谷中廣小路あり及口に死茅町

林原原屋並大砲をかゆえ打おせしとて同致殺れ

ハ原丸多くハ不思の崩水は落款方すし少くかす中

以て打也外攻口へお廻りハ内上野方ハ市橋し俗

二百三
兵車坂町へ疊し胸壁を築き黒門前へ去儀は獲る防
戦をかよひ山王山より大砲打おせし越下谷之花庚屋
表の官軍潜伏し西町より我の回ふ少く焼る之板橋通
りより一戦をくちお見え敷町少く焼る其内不く火の
も熾ん小官軍亦天通穴いふり廻り換合より切込
せし由より山王山烈しく苦戦谷中口も友軍切入し外
より上野方遠く熱崩とあり友軍大勝利大小砲銃を捕
多ふより一門主様何處へか出立退るる成りし
風守其外宿坊方不化僧も何方へ立退し外おふり
夕刻官軍法隊引去り成り本口通木道へ凱陣せり

○市中 所獨書四通

今般徳川□□恭祝し実効表するより祖宗の功勞
を思食家名お續けし仰出城地祿萬歳し依退し
御沙汰にお成末くとも去り至迄存せられざる者
は松は 越方との 思食より為立り処堂園しんや
旗下存し心留遠く穿玉厚し 所報意成拜戴し奉ら
ざるのみありん主人□□し素志は度り謹懐中し
を以て恣く脱走しおふり不く屯集友軍にお抗し無
辜に民財を掠奪し兇暴い多らざる不ありあ民塗炭
し苦に陥らんといふ故に今般不帰心事誅伐せしむる

より其害伐除き天下を業山し安し又至位也民を
し早く安堵し思ひ成たさし先ん多めおれハ櫻々
難敷き事何々為か々々篤く所執意成体認奉り
未々々々い多々々々聊心は遠き旅此を安堵い
多々々生業を管し其外又安し為記者也

五月

昭十五日より三日より名給西海濱お取し又一切是止

事

五月十四日

大総督府参謀

昭十五日より三日より留宿驛人夫繕立し後一切是止
事

五月十四日

大総督府参謀

過日以來脱走し山内山外下々屯集屢官兵を
暗殺し或は安軍を偽り民財を掠奪し益兇暴成逞
るし奈実又国家に乱賊多り已来右様者を見付次
身速く打取らるる若勢一密に扶助ハ多し或は隠
り者多しハ切あはハ賊徒囚罷多しハ者也

五月

○

翌十六日朝王子迎へて我事有りし由

官軍由人殺江戸市中并に近左不く見まらり残兵嚴し

し冷後由台捕へお成る者もまゝし

同夜赤坂迄火有りし

大総督府に印鑑又も田安一橋殿の印鑑所持多し去ハ

由門へ通り不お叶ハ



内外新報

第里三號

定價八分

内外新報第四十二號

慶應四年五月十九日

○越後新發田老侯は月中國許へ集られしに越後六日
市は新園を建倉藩の書士押留めあり用洋を所せし
其侯の儀に侯を咎めしといふは内勢の中は官軍
交り居る所の憂念より出さるる中世園は改めま
よりお人救はる新發田を送りし其後深に侯集られ
い節も倉庫入に長は宥勢を是代に爲の園門を若
しく改め百人伴の供人より一枚づり纏れを返せり此纏

札とひき金津城下を通り新費田原場赤谷に圍ふ
て艦札を戻し新費田へ着せしむ下は場控と之擋り
せしむ

但新費田原の素より金津といへる箇の交り所
藩領より一切通行せざるよし

○同日月廿七日出概念よりの末帖

去る廿七日薩長大垣の兵白門表へ襲ひ来り街を第
一山ありび又黒門口に於て我軍と逢りしに掛懸りてお始
め不討に之の戦會を勝利とせしむるに砲声鳴りて
へとてらるるに去隊繰出し又相成り金津勢もど内陣せ

ざる中に付大砲二門人殺百五拾人をどひく白門へ出
陣し孰に西谷に居る所を城に於て守るを止し中
出ると官軍近境に屯集し會をとりて襲来すに即ち
お見入概念と我と奥あり要路に於て防禦しと別て
の中心にあり

○奥あり某藩士の吐し

一磯崎本官迄より裝束を戎服に改めしれに又十人
の兵隊に於て西引戻しの変退り落失せ後日西人にて
福崎城へ西立退りお成りしより或る流し福崎関門に
て西人の名跡討ちしに亦の噂あり

長藩 世良備藏

日附 勝又善左衛門

右の人福富市中に討死にお成ひとの事

日附 松本 某少年

世良又附屬と交回防の事

日附 野村十郎

福清入口林飛急に討死の事

日附 日家本某

福清長樂より逃ひて城内に討

日附 中村小次郎

淡河と新町との間に戦没の事

日附 大山格之助

同日月廿八日以多分討死とす

日附 番謀附 仙藩 栗原五郎

白川表より野村日新と交別業中

一 仙基勢亦百人以上月廿七日迄とす白川に繰り合

一 乞三小隊福清へ出し討死す

一 仙基中合せ當時に榎板大又覆し薩長の徒に討

一 死す所の風聞あり

一 世帯南津屋の由属とすより合有る中徒し

来りて執事毎来致せしをらんか

- 一 奥羽の列藩中合せ令津附罷り身以付三春弘おの儀
- 一 倫玉苗のより多ふて此倫よゆし下り然きとも其儀
- 一 倫を以て外漢ざる事以付相分らば
- 一 安成勢五月五日白三拾人従白門口へ出張の事
- 一 相馬勢先登り郡山まぐり百人従傑出しのより
- 一 館林秋元侯の陣を羽州天童に有るに交行方とを鎮
- 一 撫相成小陣を引掛ひ上下十七人隊引連き諸及具
- 一 為通し人足はく白門へ通行致事申継立方そ交へ以
- 一 以付磐城平へかくる五月朔日湯本岩へ泊る

○白石會儀列藩誓書

此度仙臺白石よあわく列藩會儀公平正たくを以て
 朝廷と違背し生靈誠極恤し 皇國を維持せんと欲を
 仍て誓約する左のごとし

- 一 強を恃^ツ弱を侮^ス或^レ他^ノ危急を傍觀する者有る
- 一 己^ノあわく^ハ列藩^ヲ卷^キて^モ讒責^ヲを加ふる事
- 一 取^レと^テ操^レへ^テ利^ヲを^モと^シ機密^ヲを^モ洩^スし^テ日望^ヲを^モ離^レ間^スる^者
- 一 有^ルに^テあ^わく^ハ讒責^ヲを加ふる事
- 一 妄^ニ人^馬を^テ勞^シ細^民の^艱苦^ヲを^モ顧^ミざる^者有^ルに^テは^モ於^テ以^テ知^テ讒^責する

右事件ハ列藩前議を盡し公平にゆふぐ軍事の機
會細微を節同又至り少くハ庶儀及たは大國の号
令に隨ふ事

一 聖旨を教職し令教を採奪するの款想と名分を侵す
者有之とあわて速に教刑に當る事

但列藩款狀ハ日ハ新聞亦曰輯 兼ハ中外新聞亦
之十三号又名ハたり故又畧して載せは但題と駢
付書會儀に於てハ諸藩重臣の姓名の之を記し
て其遺漏を補ふ

羽州新庄

戸沢中勢次柳家来

奥州磐城平

舟生源右衛門
安藤理之節家来

日向泉

三田三弥
本多新登与家来

羽州丹波

石井武右衛門
六郷兵庫家来

奥州福島

六郷大守
板倉半斐与家来

羽州磐田

比田権左衛門
岩城右京右家来

內外新報

第 三 號



定價八分

太平序錄

吳州湯長石

內政長李九家來

齊系 碑

日州下子渡

立花出雲守家來

孟凡外記

明州采次彩田

上林後河守家來

江口復壽

内外新報第四十三號

慶應四年五月二十一日

○五月九日修夏方敷出候し

服部筑前守海陸軍附病院に法用紙扱ひ申上候の爲り
お達し候事

○同十六日此日人法候し

別紙を通す

大熱督府より候し
終出候に付まゝお達し候へども
於公候の爲り法旗本御家人中へは法紙扱ひ事

五月

徳川亀之助

其方旗本撤兵隊別組其外屯集之者先分當分之万部
兵家降也

信付以茶屋院に中進以事

○月十八日之奉仰大目付沙汰事其以并沙汰同

付へ御意方殿出候し

府内制札子に九除以板

大總督官 沙汰信以事

五月

右に通り候 信出以事早に九除以事 致さるる候

以事

○

上様沙汰名

家達様と申候以事旗本屯家人中へ沙汰進以事

○

去る十日日上野山内彰義隊其外屯集者ども

官兵沙汰向お成以事令く

前上様沙汰意又者有き性之粗暴に不修又おしび以事者

もこれより以事付沙汰追討有之以事以事沙汰又沙汰会

有之以事又之無之執以事追討有之以事以事沙汰又沙汰会

意格不お当り私又屯集しつゝ務立以振之并決しと致
是る後若遠寄るものい多度中村以治身もこれなるを
くひ

右ノ執事旗本伊家人中洩まざる振之并お福以

○月十九日所内人出候し

溶姫若孫伊事加初表にあらし伊不芳之愛伊養生ふ
為叶去る之日伊逝去是振以世後伊旗本伊家人中へ
伊世以多

○月廿日

林 大學院

若分江戸法甚に是を以有

大總督官に 依出以以対伊及 伊免に成以

酒井安房守

依久間鏞五郎

石川河内守

門文言勤仕並に余命即日石川依久間の大目付とよ命
酒井の學問不伊用元扱と余命あり

○薩州より伊届の家

共士

湯地治衣染

有吉庄之巫

有馬早八郎

右の村々の者どもは、この庄の交時七月夕時分根家
邊にありて彰義隊のりの八九人より奪ひい奪右二
人と死せき是れ屯所へ連を越せし中、聞ひゆども
敵をい奪極切、然時にお我ひいよ、を人の其場よ
て切伏られ敵の人打さく、六人よ子を負せし由
又此庄のゆどもは、於て多人数馳集りて、付を接あ
人の切ぬけ、ゆどもは、本所觀音堂あまぐり引れいよ

に、此庄のゆどもは、皆赤子を負ひ上段と退き、ゆどもは、付
不、心奪人を切腹し、を人の者も割腹致さ、あ
の交、鉄炮をもち、打伏られ、ゆどもは、探索方と者届中
ゆどもは、付退き、確證をゆ委細、中よゆどもは、敢
中上ゆ以上

五月八日

薩摩藩

同日、廿二日、横濱製鉄所を錦島家へ引、ゆどもは、
この掛、役人の江戸へ引、ゆどもは、跡横濱定役、ゆどもは、成
了ゆ

名前左の通

九締掛

志村左一

附設

鷲 右十

山本半

入費掛

志村左一

山口誠一

中村民五

恒川成助

分配掛

川久保忠兵衛

清水孫十

近藤豊右

永山富右

倉庫掛

福岡喜四

横井孝之助

大崎左吉

山崎弥一

○
上野山内はく官軍方の兵士十二三人と生捕を以てしに付松平を右倫脱のため経越さるゝ交文に依り伏せ居却る急激の返答よあよびの由



内外新報

第四號

定價八分

内外新報第四十四號

慶應四年五月二十二日

○
 水府の武田金次郎 先年中高名をとりし武田
 耕雲齋の孫あるよし へ先次系
 脚上をゆ府致され小石川の郎中_二在_一としが此女二
 日巳の刻迄あ戸表へ内國のよ_一にせ出立の行儀い
 とめづくしとて見あるゆゆ_一倍上しをそま_一ある
 に

第一書 丸の内ふ水の字白地へよく書たる四半
 の帳をな

第二番 砲 不動如山、 脩地へ上の五文字と
く書たる旗を旒

大砲 三门 車甚はて

第三番 銃 動如雷響、右同防をあらわれ

小筒 二行

第四番 不持まどし花菱の紋付ある旗を旒但し

級と
も朱

第五番 金の花菱の馬印を本

武田氏の馬上はく白毛の下に立烏帽
子と云し小具足程と紙の陣羽織はくザイ摩

を腰にさしあり

同舎弟 馬上同防

第六番 鎗 其疾如風、お同防旗をあらわれ

捨隊 女人徑

騎馬 走人

第七番 監 其徐如林、お同防旗をあらわれ

第八番 輜 侵掠如火、お同防旗をあらわれ

右隊中士分八十人許熱勢百五十人ほどあり

全隊の士白練へ赤地強襦の襟袖はく付ある陣服を
悪用は隊長は立烏帽子と云し其粧ひもあらはく花菱

あり

者三十人号又志るせし本假刃はこしらへる直
業極の抱い世察よりの江文あるを五千人あり五
百人の誤るらん欵

○

十五日上野戦争の幕官軍方伊勢の藩習取春朔未
る人の計ひはく山下料理業をかんぢんの二階より
まどれごうに山内の敵を掃くひ打にせしはよ
竹並の隊もや下さの矢束を破り切入世子を破りし
と或る藩士の傳くは

同じ戦ひは東門内か屈竟の勇士とお見へ七人ほど
討て出大勢を切るひけ引つけは節悪くあはれて三
人討死四人は門内へ引れは

因勢先登は進み廣小路へ向ひ戦ひは薩州勢と
入きかまると天神墓の方へ出る薩州勢は東門口を
攻破りは

長州勢は谷中の方へ向ひは交地勢は敵方より
の木蔭より掃くひ打は

薩州勢富山侯をより繰出しは百人ほど振隊の方
へ進みは交地は東門内は彰義隊の士は三十人程

固め居ては接戦しお成りおどろく拙し今ひき人強
勇の者とお見へ踏ととくまを奮戦しし内彰義
隊の者ことごとく谷中の方へ引りけ右の士を人ほく
官兵武之指人よりと負をせし場を去らば討死致し
外し

○ 日不戦争中臥竜隊の兵士殊に激戦しし外し

上野戦争の跡兵音羽後持院へ移りし風岡有之が
て官軍惣本侯佐賀侯を介し四藩に軍勢去る十六
日午後同院を囲み穿鑿有之の穴を潜居しめりゆき

とお名へ夕刻解兵しお成り牛込の津つを通り引上げ
しとぞ

甲州路の方へ大勢落ちし風岡有之が十八日藝
勢四ツ谷新宿へ出張有之の外し定て追手に向ひ
しちんとの風岡あり

○

小石川小籠首町より通り茗荷谷徳雲寺といふ禅院
へ去る十五日の夜歩兵百人ほど落ちり同寺に居り我
服ぬぎまきて仕度しし小籠首の寺に色竹をへりて
去りて十八日因新宿の勢より大砲二門を介統

係はてぬかこ住持へ談判と交事の体少しも強さ
は徳川家恩義のため少しの内休息致させぬし
お普光も頼りぬし小銃四十八挺と進めぬし
持ハ西石連進とお成し

其節不化僧を人階と見捨がうかりハ附係あり
よし其後門あきりの一月官軍方へ款額としてあな
れどお出ぬしよし其後いかお成ぬし
世時あ戸の武田勢援兵として出張ぬし

廿日本後官軍の法廣野あ急へ出張とお見へ退く

伝書通りのし

○

十六七日の以上登津山内へ入窮民どもおと宛茶穀
の跡を抽出しお急退と少待く大勢押し入法及具
等々置び出しぬしぬし門とメお附不とへ抽出し
ぬしの西洞ぐとお成ぬし

廿一二日以法方行くし佛書類又のちそと家具等捨
有るを騰く者大と逃致しぬしぬし右の全く抽出
しぬし族津洞ぐとお成ぬしぬしぬしあるべし

○五月廿日伊豆守致す後し

三十一

勝 安房守

織田 和泉守

山岡 鉄太郎

岩田 織部正

大幹事役也 仍付之付由政事向之關係以多一以
以用向之起為其扱者旨了ら得其意以尤為心はお達
可然向之々案々及等並に扱了ら致々事

五月



内外新報

第四五號

内外新報第四十五號

慶應四年五月二十三日

○同日八月日出山形上巻の末状

廿二號より出せる山形來状と参考を合す

去る二月庄内勢仁田系ニツクにして清基と中五へ屯在し天

童勢溝延ミナト作セ二号ニ溝延ミナトは秀増ウラナカを中陣しお成最上門を

隔砲費に及び去らうく打合しをせぬ庄内執行方より

川を越し郭窪の目セ二号ニ窪ガ内ノと十ト五ノ相サ初メ

秀増を海延途すを放火しつゝ翌四日己の刻天童へ礼

入市中へ火を放ち以て付儀田勢海延よを引返し大に

防まひへども酒井の多人殺又打志くまされ織田勢叶
り散乱しる由城内にも家中の面く我先に城
に火をかけ落し故諸方一圍火煙とお成い軍師吉
田大八廿二号大炊を人天童の棒をふ九のふへ踏こ
止まて防戦ひ多しへども多勢力を引交ひ多しへ是又
叶るに東山の方へ落しき逃あがく三日夜引返し
血戦又あよびひし尤も敵の首を口ににくりへ一ツ
の屯の子を引さげ血刀を擧へ落しこと近以英雄と
中唱に天童侯の関山越に仙臺へ落られし相
山形より百人許山形より西北長傍達摩さ口へお固

り居い交是へも酒井勢押よせ炮戦よも劔闘もお成り
双方負討死するれらるし山形勢の死傷左の如し

戦死

- 大久保 屯
- 赤星守人 モリト
- 松崎叶四郎
- 前田勇次郎
- 前田庄助
- 加茂政宗
- 梶岡本平

深子

岩永郷古跡

申子越え進

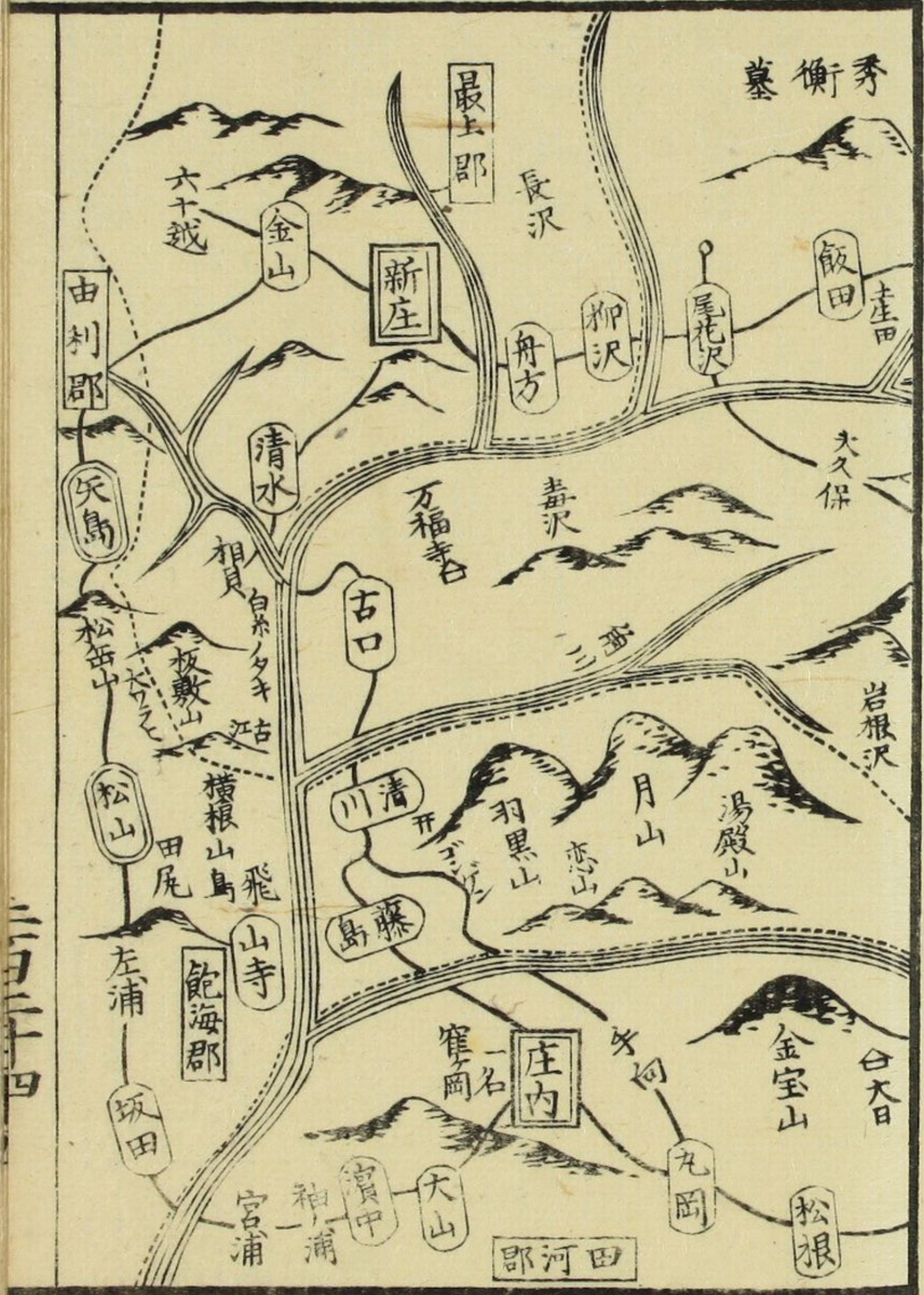
子負

津久井原右弟門

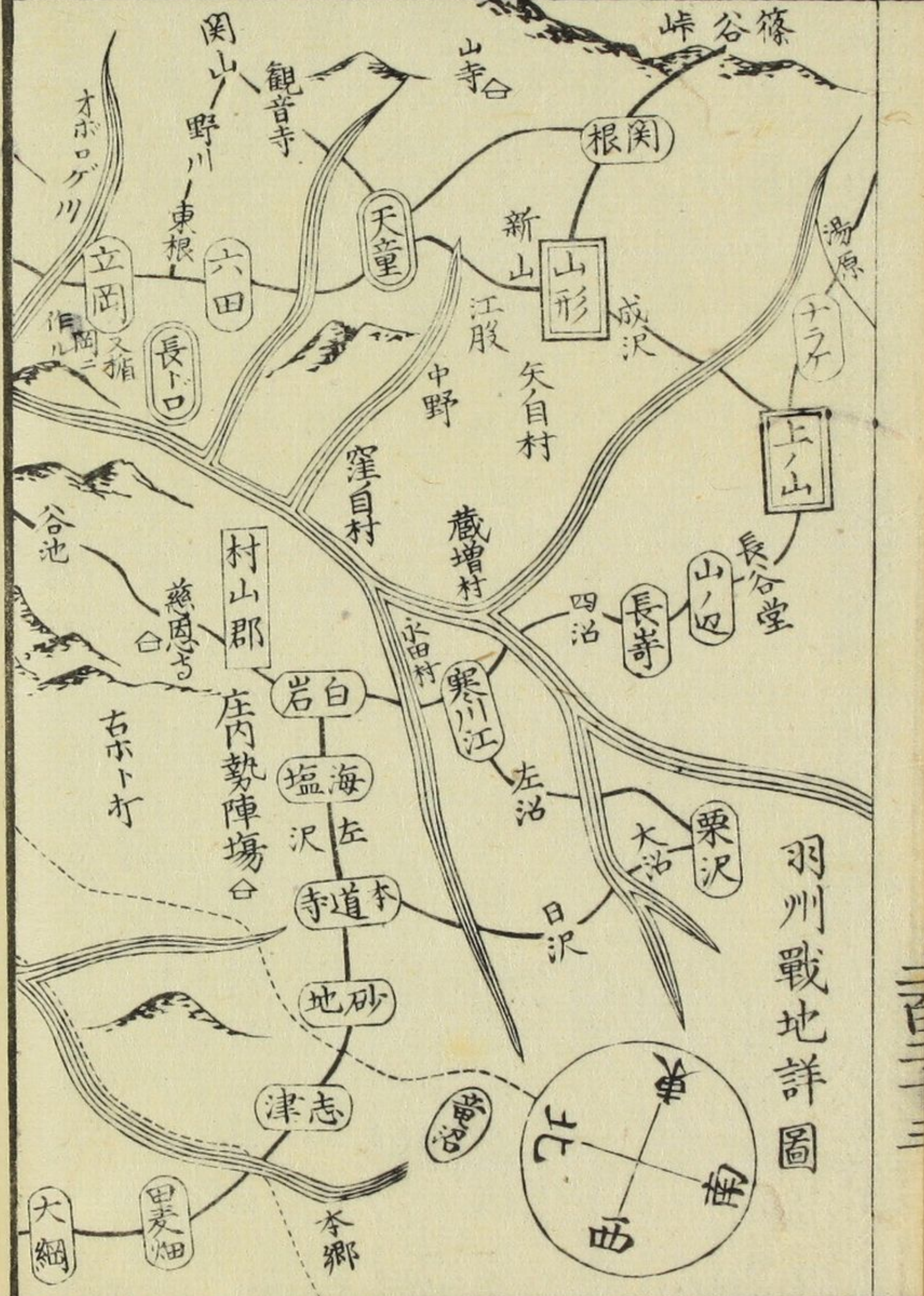
稲垣道右弟門

右行まゝ余程々御き有之山形侯は威人致され由
乍去庄内方中々強勢はく高き程くお見へ中々其内又
左邊こゝろ小文治の目かかし子の者三百人隊引去しがく庄内
へ加勢い多し由日夕方より山形へも押寄りて我

はく市中近をとも歩らば家財法道具九片付老人女子
は在くへ立退大混雜に在り候三位殿の新庄城まで
歩出陣より成り上の山山形より小人救合六百人行
附随ひ新庄候水口と申す陣屋へ放火し其不へ屯在
り候此處天童の九合に付引返し楢岡手土生田ハブタと云
ふはく庄内勢と出合六月午刻より大戦又お成りよ
しまと勝敗はお分り不申且五日籠籠人救九十六人仙
基岩沼より立越六日以後又同藩五十人洋湯の系へ着
一子又成り山形市中救合に足り候と申す固め居り
不庄内勢西在遠不と申す費り立り候付日夜光助を申



二百二十四



二百二十三

ちと出立下案所新門方へ二夜延て今日の寒門に
お越山形三日町月々々令兵隊峠後吉井又八日町
同所かし為吉子ふども双方七拾人陣引連立山形へ加
勢として兵出竹是も捨せ引提突といかめしき事以
座以市中ハ助家にお成り土務同ぬり以多し以方へ来
酒味増為賣人等々只々騷々存在以今日も長溝へ放火
~~~~~  
燒失にお成りよし

○月十一日同不より之の末状

八日官軍決之位殿新庄より陣引成し楯尾より三里

下尾迄以以て我々官軍勝利庄内勢を門向を退後官軍  
つゞろく門を渡り白石廿二号白石に出張庄内方の  
ゆけろ六十越と下尾の入口を立切るを勢ハ薩長山形  
上の山形合八百人陣と申るは十ふとお固め居り由  
山形よりハ籠城の人殺百三拾人陣も先子以て天童へ  
且て以て天童より又ハ吉田大ハ先鋒として手勢百人  
陣引率十日己の刻以て水田村へ出張左沢小文治子  
先く者日以悪徒共又ハ我々者の家へ放火し三人を捕  
りてより以相と申ふハ之我々農兵組の大助曰夜其勝權  
内と申者を生捕白岩の陣不ハお渡り申り右ハ先日庄

内勢へ手傳ひ天童へ放火ししにりあしし世に  
 左澤小文治を始め農兵ども三百人も石捕りし且荒れ  
 勢左沢へ立越河井勢を挟みたる致用を以て交既二十  
 一日白岩へ寒川に上り騎出し大合戦とお成り己の刻  
 以上を未の刻まぐ砲戦引つゞき接戦双方に負付死者  
 有る庄内勢は引退きしに世に如何お成り哉官  
 軍方は是れとも庄内勢を逐散し小文治を生捕りし  
 配の趣に世に余の退く事上り

# 内外新報

第 四六 號





内外新報第四十六號

慶應四年五月二十五日

○甲府より來帖抄出

去る八日水野出洞守よりお筆以

一 當城徳川官を御書致し居り専光甚く御

王<sup>二</sup>世<sup>一</sup>二意執院書出せ及不<sup>レ</sup>お替<sup>レ</sup>書致し<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>此<sup>レ</sup>抄

し<sup>レ</sup>系<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>然る<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>今<sup>レ</sup>取<sup>レ</sup>面<sup>レ</sup>安<sup>レ</sup>應<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>即<sup>レ</sup>へ<sup>レ</sup>徳川<sup>レ</sup>家<sup>レ</sup>お<sup>レ</sup>候<sup>レ</sup>社

係<sup>レ</sup>封<sup>レ</sup>禄<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>近<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>ア<sup>レ</sup>社<sup>レ</sup>定<sup>レ</sup>裁<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>付<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>長<sup>レ</sup>子<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>玉<sup>レ</sup>徳<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>之

徳川<sup>レ</sup>家<sup>レ</sup>へ<sup>レ</sup>頂<sup>レ</sup>瑞<sup>レ</sup>波<sup>レ</sup>成<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>ア<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>世<sup>レ</sup>傳<sup>レ</sup>而<sup>レ</sup>仕<sup>レ</sup>之

望<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>族<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>何<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>無<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>在<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>平<sup>レ</sup>生<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>兄<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>意<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>定<sup>レ</sup>米

と存い衆物を急降来る十日中右出於了其後復ゆ不  
望し其を眷族等石連き交度洞江舟内武有る乃其後  
送らぬ下又い是をこのごとく

至宝は多致度等いぬゆ極くも少後利了は為在一祝  
同仁く

思食し奉戴し生海に活計迷ふ定し去就了は出

副総督府

東海道鎮撫

副総督府

森謀印

右内武出外向も十日後の交度以て水登出烟也  
附送に之由武のト

○又月廿八日喜梅在より来てし農丈の吐し  
武所<sup>コ</sup>高<sup>マ</sup>番<sup>ハシ</sup>那<sup>シ</sup>版<sup>シ</sup>尾<sup>カ</sup>在<sup>ハ</sup>社<sup>ハ</sup>仁<sup>ハ</sup>子<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>つ<sup>ク</sup>る<sup>ル</sup>も<sup>ハ</sup>り<sup>ク</sup>山<sup>中</sup>以<sup>て</sup>  
至<sup>ル</sup>要<sup>害</sup>ト<sup>レ</sup>地<sup>不</sup>ち<sup>り</sup>志<sup>あ</sup>る<sup>も</sup>少<sup>シ</sup>以<sup>て</sup>東<sup>敵</sup>山<sup>の</sup>跡<sup>を</sup>  
のよし多人救はて七し近江の農民退くをせ加たり  
之を急糧おびたがしくお集め防戦の用をおとす  
然る所へ官軍方討手は先向黒海川より<sup>アキキマチヤ</sup>扇<sup>所</sup>谷<sup>邊</sup>へ  
宿陣し交する廿二日夜浪士勢不意に押出し本砲殺  
十挺外小銃以て打ち故俄く予は官軍方引

此の戦に西存は生及の戦年いらぶお成ゆや女守の  
こ夜より女守日よあひく新室へ熱勢引とややよお成  
ていより一但し版部のおく放火ありしごと

秩父色の風習はく年々益以よの大むせを以て村  
こよりを大なる成きそへてそ大なるまありてい  
本筒の丸こ一このく長き六七尺もありてし竹た  
がとまに向多くかけたり世戦ひも用ひしり多ふ  
世筒ありとそへて又世色の将人多く信右に世者  
ども隊中へ加えり大なるきしとぞ從て後の  
事実とにば追々去るべし

○ 相州小田原辺の 事次号よおはる

○ 女守日若は東叡山よあひく官軍方より下谷湯へ  
本谷中約三浅草根家辺に介ありて十日戦争に  
て秘をせしめく施承あり

○ 何々者まきものとお見へ里の本谷にそを重し一  
何方おどの箱をうのりものと津督發元体の人とあ人  
救はく昇津旗本直殺十人ほく津警護あされあ廿六

日初五ツ半時辰小石門傳通院前と浄通行を申し如  
何あるものやお多しは風聞のハ多分 東照宮様  
の浄尊像あゝんかといつと相見の法人も多し又涙  
さしづゝとく

去る十六日初籠お戻西園浄宗山門格儀に在りそ  
級を重叶又たさみさくし有之よし

上野山内脱袴

山内平次家

二十二之位

白金七郎

四十八九之位

○志州為羽の儒士あるか一の妻國作へ出立の  
折その婦又わら紙をおくそかくてしるも  
おとそゆる人のさしこそまきくは志州  
ぬ

春のつまぐちるまき華とそそふと世の中を思ひ  
くもれ生者必滅命若定難ハ義相の長ある人若と和  
め為秋よりくるまき凡性あるもの世理をせはれも  
紙がくちやき紙はは海浪志づき浄代のその始め  
義玉治徳川上又二タ義の木の生ひ初るみとそとくの  
ふそ紙上を志の位そあるまきと表上の辛苦情なく

棲る深岩を志のきつて芽出夜老木と成りとけて年  
と枝葉葉へ仍く百年うとたぬきし心むよわ  
や月と雲ささる秋風と今いと命根えん枯るんわ  
さぬい歎くはも程のまりあり傍にゆふごころた  
のむ木の下ありくを催うの純のかちくらん夜のお  
経もろちしありかよした子もちりぐよゆくえん知  
らぬ大和路やゆて来蘇路キッジのゆもるく才のおちり  
きん定めるき世のまへに催をかち志る人よせんる  
砂の松もふ葉又限るといこきるん生者必滅命老定  
誰の死ぞあはれ是恥あるときと終の元量の爰さめく

去如の月の明く夜く遠くを夜しを比獄の責ア、悟  
きうしくも世のまよふ人ど人ままよひぞ

か定の世のちりのまよ終いつくともほのせた  
の世才ゆくわくせを

○

神田河田丁へあ大所の大福一社打まき有る由届  
お成い先町内はく大切はくく一巻外寄傳沙汰の  
かめむき右へ糸備の人あふよ有るよしこきもとせ  
戦本後日石より持出しゆのちるんと町方のめり  
吐しきり城よ世の礼を多る涙とふめゆ人ぬこの

內外新報

第 四 七 號

定價八分



多

三

内外新報第四十七號

慶應四年五月二十五日

○横濱へラルド五朔廿二日開板 新開抄紙

尚港に投錨せる船の熱計二十を繰るう世船名及び出帆せる地名とろくし着帆せる時日と充し揭示は

チフトリ船

蘭ロンドン屯より四月六日入港は

イナガワ船

サンハイより四月五日入港は

ケレックト船

フランシスコより三月十五日日

アター船

ホニコニより四月九日日

ボリハル船

ソラジャ子占より四月十日日

三十三

|           |                |
|-----------|----------------|
| パンテウト船    | 兵庫より同月十八日      |
| オレース船     | 同より同月廿一日       |
| モ子イタ船     | ミアムより同月三日      |
| ベ子ハクトリー船  | ホンコンより同月六日     |
| ソツピアヘレナー船 | ボルテウスより同月九日    |
| ブラニチ船     | カルジヒーより同月十三日   |
| ヘルマン船     | イニラニトニーより同月十六日 |
| イタリー船     | カルジヒーより同月十七日   |
| パルメニオ船    | ロンドンより同月十九日    |
| シヨンプラー船   | 同より同月廿六日       |

|          |               |
|----------|---------------|
| ススヘルセー船  | ニウヨロクより右日     |
| ケワ子一船    | 同より同月廿七日      |
| アルビオン船   | オーストラライより右日   |
| アレキサンテル船 | ニウカストレより同月廿八日 |
| エンクララ一船  | カルジヒーより右日     |
| ハルレーホルズ船 | バルチモールより五月廿日  |
| オシクルドヘー船 | ニウヨロクより五月五日入港 |
| ヘロシチー船   | ロンドンより右日      |
| ラ子ルコスト船  | 右日            |
| ハルリート船   | 箱坂より同月十日      |



ブラーへ船 カルジヒーより右日

ハム、エリサーベツト船 アムステルダムより同日十五日

ジヨンニルトン船 カルジヒーより右日

ガラースメール船 プレーモートより右日

デスハーチ船 兵庫より右日

アテン船 サンハイより同日廿一日

○

茲お佐世の密探して佐倉侯内親王にお成り藩の兵  
二百五十人程にて守備致居り此日同日本文津辺  
へ何方の脱ぎや山窟の近辺徘徊し以て執佐

倉の藩士聞付に捕り執ちりしを脱兵の方へ候を  
聞へしりや去る十六日取敢て人にお集め十七日未  
明迄のびやうと佐世城へ押しよせ裏手より不意に  
大小砲打込み討入り以て付城の争はく防戦し一  
佐倉幣の小船は密に福澤と巴り引とる脱兵の生口  
はく城中の兵悉く糧食を集め是又船は積込し何方  
へ乗出し以て我れ知るべきとの候なり

是後佐倉の藩士引出し以て人を手毎に万々  
城を守居りし

脱兵の多分小田原に集りしとる候なり

○

此頃お豆、後の同陣の外務が、貴衝を此來出来居津  
 城も落去し、<sup>ハコ子</sup>函巖へも屯集せし兵あり、又小田系城も  
 何と成りしるとまぢく、の風吹るれど、先陣よりの  
 長為は、川々の満あり、へう通修不便と、首をねむり  
 方より、も其報告あり、近日常説を、以て法若も、若ん  
 ○  
 才一大隊歩兵先陣脱走して野あり、あもむを、四月十  
 九日、以て津官城を、一子に攻むとし、其後、若んして

何方も屯集せし、やね多し、此節三百人、津隊長從  
 本某を初め、大田系城へ攻む、官軍と戦多し、および  
 必死の劇戦あり、遂に城を抜き、いよしを、も多分死  
 傷あり、あもむの、多報告あり、又一説、右の官軍、白旗を  
 出張し、城へ攻む、せ城を抜き、放火あり、いよし、あもむ  
 援を、勢多し、故、あもむ引退き、いよし、あもむ

○統制の養生を、怯む、あもむ戒め

或人、正月、伏見に戦多し、胸の左辺より、脊中へかけ  
 矢弾は、打抜きしが、幸ひ、又肺勝を、よけたり、坂城に  
 一、あもむ療用を加へ、蒸氣、あもむ十日を、経る、あもむし

医療十日にして脊口念たり九十日にして胸創念  
 ざれとも痛を忘るたり快氣は任せ出節せんと試  
 又三里をかりのおせ片路を歩んと思ひ出し又余  
 等は暖せしうばを日より尤の肩又痛を發せり医蓋  
 刺せりこれと蒸せると十余日にして治せばハ  
 ツフと用白とつくども念へば内少く快く又二里  
 計歩行しそ七日の痛を忘るる念へば内少く快く又二里  
 を誤し三日余を經て創傍は清肉一層を生じたりを  
 の時外医を傳へ示せし又念く歩行の故なりといふ  
 又より創口はパツフと念へばこし藥湯にメルきを用

ひ<sup>コンニヤ</sup>蒟蒻をゆつと蒸し四五日にして肩の痛を忘るれ  
 ぬ頻りに蒸せると二十餘日にして大に快し医戒め  
 て曰く是を刺し貼せると膏藥をゆつと又これを  
 考く又傳布をゆつと考るるを視体を知かきしめざ  
 るが為なり起卧初揺るるも程治效を速に考る能は  
 況らんやゆ歩まるとかゆをやと実験するも世  
 之に遠くは今日百又十餘日にして未だ平念せ一日  
 門を出るを痛十日治せ一日茶を拵るを痛二日歇  
 まし重蒸を拵るを或ひは五六日あり竟に終身  
 の患をちる戒めざるをらんや

内外新報

第

九

號



定價八分

方今騷擾の甚況創を彼るものまさよあかしくし必  
しも少愈を負んご性命を乞つこころわ然

三三三三

内外新報第四十九號

慶應四年五月廿九日

○補遺

○横濱「ベリッ」新聞紙より抄出

一 三月廿九日 即日本二月晦日英國の公使系船に於る  
マ

帝王に相謁せんとす所ある途中日本人に襲はれり  
初め中井幸彦が必く使館の儀を引連せ又く使館  
護衛を以て公使直に出立し後着象二郎といふ官の  
人ありて「通弁官」サトウをかくまひて附送ひ其後  
の従者横濱に曲らんとせし時嵐針らんや其を以て破

二二四

より二之間行過ぎしが離れたる所より殺あの日本  
 人不足しあ側の位存より飛出者あり獲物エモを持ち  
 尚てまぐれに切付る其内は中井孝彦馬上より飛下  
 り大に我ひびく石につまづた頭上は疵を交り  
 思ふは悪徒の内命かけはちりしめのを唯二人を  
 後後象二郎は彼に附るひ居る未だ角とまがくは  
 馬上より下りて世形容を見く居しが中井孝彦の  
 危きは救えんとて馳付け人を殺し亦人を殺  
 獣のごとく破落出別高は馬ちどりも疵付破れ  
 まゝ陰刀ピストルの疵を交りどもは仕業のまき

突はわどろくをし遂に逃去りまじり「ニストール」  
 ら  
 所不よりきらの愛もなく怪我人多く旅館へきし床  
 せり医師等熟練ちること突は賞を乞ふ所のるは  
 多くの怪我人を療治せり  
 一人を吟味はかゝりしにその初めの日類は  
 元来大坂邊の僧にして京所は来り神具を入し  
 言ひしは遂に日類はるかか玉人と殺害せん為り  
 来りしこと我白状し後後象二郎の刺し首を見ま  
 りこれを見たるは我白状し再び白状せり

外に同類ありとは是為我捕へられしなり

一唯二人はと莫吉利兵士七十人を禁ふとい実と大胆あり

一時時系所政府のおを我為の為めよの脱をせし

皇帝公使へ見舞の津使者を遣はされ又津大名前より津使者をつりよきなり系所政府の親しきこと

の日本國中の津獨書をうつし志すべし其書よおを人々を殺害せしもの刀劍をせよられしはよお式

に志すがくの刃を別獄門よきせしと世為公使を襲ひし時の囚人知めいおを人々を殺害せんこと我た

らとし者ちれどもおを人々親切に扱われ威服する大に後悔せり

大に後悔せり

一世駿動の翌日公使を内官の人よ日本三月三日の

相偶ちり公使大に喜び翌日系所を引くはゆりて

殺すよ翌日ちり伏見はる系所官の人よ今ひ其人の云ひしよの囚人を罰し同類のりのの取と一おのきりせし中

一當時日本の擾亂仍未如何あるんや外國人も懸念する所あり志すれども天帝人を捨てかきり扱くる

よ其不を以ては然をたると一時の真に吾人の共

一傷む所をとりくども馬んを日本開化のよき糸玉又  
凌駕するの深き是よりさるを知らんや唯然くの  
高時

朝廷は修と政をまきくみのよき世意をな載し天啓の  
玉中糸玉のえ端をとり内外事務を裁割し毫も其間  
一私曲あらせりしをさるはして水のまはくは深き  
かごとくせのまきく一契まら如ぐんは亦運んの  
英國教師云ふ

「ハークスを傷つけあつたのをも医師の息にて名  
朱雀操と称し十九才ありし」

○  
青は十を号よ下若を花を委へ官軍階伏せしよしを  
裁りしこれをも今く傳聞の誤りかゝることつ文  
はちりりしこと明らかり

○  
題名は  
よき人さるべ

つれぐはは後る友かき神ぬはるのぶら岳の八月  
あるを

○  
八月十日戦多騒ぎはく上野山下をふるお屋のた



うとあるよし王子退く逃しが救回ありつゞきこの大  
るはく荒巻山下の川水漲り居るゆきこのりの後も  
わうね計をちうしげ曉むをし彼町人遂に此方の為  
に溺死せし土人も是を是と誤りてし程をくそ  
と引上るるよし令ふふを風長をよつくと替負あり  
と突ふふ令のまきもかゝる朽よの塵芥よとしく  
身命を救ひがとまきめのと思はるる

○

八月廿七日越中碓氷に法常と洞徒有る者隊の壯

士と對向せしめ彼方より小銃打出し本劔をもち  
戦闘せしと突ふ烈しき洞徒ちうしとぞ

○

同廿七八日辰野宿へ甲府に居るの旗本志のよし衣  
はは甲府にそせ度朝臣よお成り人との所の同  
ありに居るお成らぬのころを引たりひ出射らぬひの  
よし大勢の多ゆへ宿中まご混雜の振あり

○

同廿九日薩州侯藩士大勢出立定めく象島へ出陣を  
るべしとのり

○  
此頃利根川へ死骸おび多ししく流き來りてよし定  
めし川上には多戦多有しあるべし大利根の方をむ多  
きよしとて此のありの活しあり



# 内外新報

第 五 號

定價八分

内外新報第五十號

慶應四年六月朔日

○福島よりの來快寫

一 閏四月十九日朝

勅使碓砮が於教沙路去傍仙甚候人殺るゝび又福碓  
侯の人殺附添ひ福碓沙路致す

勅使沙通の事也へ道筋路を固ハナ及たは候也  
以候龜ニ然とて水舟を戒めおごそなること  
をん方々二本松より同日夜本宮殿へ西一泊沙成  
以京十八日より十九日へつけく白門表へ出張の仙

甚藩のさうじ引をさういよお成を程ちく今津の兵二  
百人津野白川へ繰出し以罪をお咎へ以に付本宮様  
より二本松城下と所本陣へ西止宿をせし是翌廿日  
もあつよ津野をちり

才三十一号又碓砦少於殿廿月七日白川へ出陣の  
よりまゝ二十六号又十日八日の以白川へ津入株  
と志るせいの傳聞の誤りもよと世末伏の誤り程確  
報とゆり

一羽お夜上辺初揺るまひ去る四日夜より五日六日  
まゝ二十六日舟越し天童越る一旦お累のへば唯今官

軍勢の人殺すに込込出陣はくそのちの合戦程く  
多し中にもなり

毎夜篝火のそと白川辺の山と西今津松山辺より嶽  
山西山道お候が川よりさるまゝぐ大かどを火はくさ  
らぐく暗夜も白日のどくくよなり

奥か福碓

横家路町旅宿

某

同日月廿八日

○

又月廿七日薩州英氣郡海門丸不海へ入はれ月廿九  
日の物色日出帆志ころ才三十九ウオルキユン九を  
鉄入津し午後は馬り富士山程ありび又舟を渡し  
鉄入津志ころ

○  
と徳より来る女と日出志ころもの吐し又房州  
迎へ脱走兵ありひ百姓一撥号屯集するころり下  
徳休余侯の人救出張ありしよしと少々り

○  
同所へ官軍方十名をど出張東合は旅宿し村と反別  
丸箇第等は丸洞山より

○  
川越は戦多ありしよりほく高石へ迎奉来上しめの  
ありしがいまど確報を以て

○  
又月廿三日掌海生フロイセンオルカーン柏松山侯の若物を積  
こめりお海を出帆したりしが何やへり松山へ上陸

まろくく能をいしと兵庫へ出さくくまうれども世  
地つもまくと上陸する能は空しく尚地へゆき  
せしよく世船へ乗のつきたるからきりの吐しちれ  
ど何等の故あるとつまど洋なるべ

○  
又月廿二日出帆志く横濱新中へ玉州人月不市  
中二あろく<sup>フラス</sup>西人と切寄せしこと候のせより候  
とつんども町名をいびし時日を志るさば候後  
報をゆるく之と洋うふせん

○又月廿九日

病氣の身程と重りし候事免

日光寺

新庄右近将監

歩兵廿三

徳山出羽

津国付

矢口浩一弁

陸軍副総裁

前沢志摩

騎兵既並

是田徳之進

步兵既仍

横田保之

步兵既

福王合之弁

撤兵既

福田八房右之門

砲兵既並

天野龍之丞

遠山修理

步兵既並

久留左京

松田之稅

和田勝右弁

加茂流後

林百弁

孝田彦八弁

小林端一

間宮常刀

撒兵改卷

堀 岩古部

真野弦吉

间宮鉄之助

乃抄身  
乃抄身  
乃抄身



